

(様式5)

教師力向上支援事業派遣研修報告書

- 1 所属・職・氏名 富山県立富山高等学校・教諭・野村 学
- 2 研修期間 令和6年7月25日(木)～令和6年7月26日(金) 2日間
- 3 調査研究課題 進路指導に生かす県内企業理解
- 4 研修機関等 富山経済同友会「教師と企業人との交流」
- 5 研修の概要

【講演 株式会社MGG 代表取締役社長 牧田 和樹 氏 「人間力について考えよう！」】

牧田氏が会社を継いだ時点では経営は大変苦しく、負債が年間売り上げの半分をこえるとその会社はもたないと言われる中で、負債が年間売り上げを上回るという状況であった。氏は、会社として理念・ビジョン・方針を懸命に考え、示すが、PDCAを実際に回していく「人」が動かないと会社は機能しないことに気付き、「人をどう動かすか」を突き詰めていった。「人は説得されても動かないが、納得すると動く」という点から、納得したことで主体的に人が動いていくようにすることが必要と考えた。人が納得するのは、人間的・能力的魅力のある人が、情緒的・論理的対応をしたときである。ここでいう情緒的とは、人間味・人間らしさを意味し、論理的とは、筋の通ったわかりやすい思考・説明を意味する。人を納得させるには、人間性・知性・意欲からなる「人間力」が備わっていないなければならない。

【講演 YKK株式会社 副社長 黒部事業所長 小林 聖子 氏 「自分らしく働く」】

小林氏は「モノをつくってその対価としての収入を得たい」「海外赴任をしたい」という思いから1988年に現在のYKKに入社したが、その後のキャリアは「女性初」という枕詞の連続であった。当時は「営業＝男性の仕事」という意識が支配的で、女性は研修でコーヒーの入れ方を真っ先に仕込まれるといった状況であった。そういった状況の中で、本人の並々ならぬ努力と、上司の理解・協力や男女雇用機会均等法の成立・改正などの社会情勢の後押しを受け、2000年には女性初の海外赴任、帰国後の2010年には富山県黒部市に赴任、女性初の黒部商工会議所副会頭となった。

氏は、「キャリア」を「人の働き方の過去から将来へのプロセスであり、人の生き方そのもの」と定義するとともに、その80%は偶発性に左右されるとする。自身のキャリアは上司の理解・協力や法改正などの社会情勢といった偶然・運に恵まれたという。しかし、氏の並々ならぬ努力が上司の理解・協力へとつながったであろうこと、時代や社会の「あたりまえ」をただ漫然と受け入れるのではなく、現状をよりよくするためには何ができるかを考える思考力とそれを実行に移す行動力がいろいろなものに革新を与えたのであろうと考える。

【講演 株式会社ユーグレナ 代表取締役社長 出雲 充 氏

「僕はミドリムシで世界を救うことに決めました。」】

出雲氏は、自身が18歳のときにバングラデシュを訪れ、そこでグラミンバンクでのインターンを経験し、ノーベル平和賞受賞者ムハマド＝ユヌスと出会った。バングラデシュは人口1億7千万のうち、6千万人が農業に従事し、1日の収入がおよそ100円という、世界の中でも最貧国の一つである。そこでの栄養失調の実情を目の当たりにし、氏はすべての栄養素を含むミドリムシの養殖を実現することで、貧困を解消することを決意し、友人とともに株式会社ユーグレナを設立した。

ミドリムシは食物連鎖の最底辺に位置し、培養中に他の生物が食べてしまうので、長く養殖は不可能であると考えられてきた。氏は500回もの失敗を経て、2005年12月に世界初のミドリムシの養殖に成功する。しかし日本国内の企業は、実績の無いミドリムシ研究への出資には消極的で、営業に訪れた500社すべてに断られた。倒産寸前だったところ、2008年5月に501社目の伊藤忠商事が出資・支援することを決定した。現在では年間100tの養殖を行い、クッキーやサプリメントはもちろん農業用肥料や飛行機燃料の開発にも成功している。氏は、「聞いたことがない(実績がない)からだめだ、ではなく聞いたことがないからおもしろい」という発想が、チャレンジする人を増やし、日本を元気にすることにつながるという。

氏は試行回数×科学技術＝ベンチャー精神であり、これがこれまで不可能とされてきたことを可能にすることにつながるという。失敗を繰り返しても何度も挑戦を続けていくために必要なものが、メンターとアンカーである。氏にとってのメンターは、恩師ムハマド＝ユヌスの存在と、恩師とかわした「貧困博物館をつくる」という約束であり、アンカーは恩師からもらったTシャツであった。教師が生徒に様々な影響を与え得る存在であることを自覚し、チェンジメーカー・イノベーターになる生徒を育てていきたい。

【アクティビティ研修】

アクティビティ研修とは、一見困難と思われる課題への挑戦を通じて、チームワークや問題解決力を養う研修で、身体や知能を使った実践的活動を通して、自身のコミュニケーションの長所や短所を発見することができる。今回は6～7人の班を構成し、班員全員で手をつないで円をつくった状態でフラフープをくぐったり、目隠しをした班員に他の班員が指示を出してテントを組み立てたりした。体を動かして協働的な活動をすることで、班員間のコミュニケーションがさかんとなるとともに、自分と異なる環境下・条件下の人を慮って行動したり発言したりすることで、多角的に物事を考えることにつながった。

【研修に参加して得たこと・考えたこと】

小林氏がYKK初の女性海外赴任を実現した2000年から20余年が経過し、女性を取り巻く状況は大きく変化した。今ではYKK内で女性の海外赴任は当然の機会となり、また赴任先もアメリカのような欧米諸国からインドやインドネシア等のアジア諸国まで多岐に及ぶようになった。本研修内のディスカッションの時間では、情報交換をする機会に恵まれた県内企業の方から、社内における女性の存在感は日々大きくなっているという話を伺った。2日目のアクティビティ研修を進行したのも、(株)フクール入社2年目の女性であった。またYKKでは、黒部事業所への本社機能の一部移転に伴い建設が進んでいるパッシングタウン（自然エネルギー活用の賃貸集合住宅群）の中に保育園を設け、社員の出産後の早期復帰や、子育てがハンディとまらない多種多様な生き方の実現を支援している。このような県内企業の傾向や施策を知っていることが、進路指導における引き出しの一つとなっている。

牧田氏の講演において、人間力を育む3つの要素（人間性・知性・意欲）がどのように育まれていくかが表されている図が提示された。日頃の生徒への指導の際に意識していることである、「大学進学後にさらに大きく成長する人間」「社会に有為な人間」といった点の土台となる「人間力」がわかりやすく言語化されており、自分自身が生徒に対して働きかけたい点を、より明確にすることができた。またその図を生徒とともに見ることで、生徒が自身の成長に必要なものを客観的に見つけることにつながるとともに、こちらの働きかけの意図を理解することにもつながった。

自分が担任するクラスの中には大学で経済学や経営学を学ぶことを志している者がいる。その生徒との面接の際に、出雲氏からうかがった、大学発スタートアップ企業についてのデータや成功例、失敗に屈することなく「チャレンジ」し続けるベンチャー精神について話した。生徒は、漠然とした「起業」という知識は有していたが、成功例を知ったことで具体性が増した、と語っていた。

一方で、本研修を通して、社会や企業というものの動きは自分が思っているよりも速いということに気付かされた。自分自身が社会の動向に鋭敏であり常にアンテナを高くはり、今回の研修で得た情報や経験のアップデートを心がけていくことが必要である。

今後も、正しく新しい情報を常に収集することに努めるとともにそれらをわかりやすく生徒へと伝えることで、生徒が自身の可能性を信じ、将来に希望とチャレンジ精神をもてるような進路指導を実現していきたい。